

異世界で失敗しない100の方法2

Main Characters
登場人物
紹介

ウォーレン

ハイルの旅の仲間。
巨大な体躯と厳めしい
顔つきだが、態度は
紳士そのもの。

セス

ハイルの旅の仲間。
常に冷静沈着で、
感情がなかなか
表に出ない。

ハイル

金髪碧眼を持つ
美貌の旅の剣士。無口だが、
行動は紳士で優しい。
ソーマに心を開き、
友人となる。

ジャック

ハイルと共に
旅をしている弓の名手。
やんちゃな性格で、
周囲の人を明るくする。

メアリー

ミレーユ村で、ソーマの
仕事を手伝う少女。
ちょっと勝気で
不器用な性格。

マチルダ

ミレーユ村で
染色業を営む女性。
きっぷが良く、
かなりの世話焼き。

ソーマ(相馬智恵)

異世界にトリップした、
ファンタジー小説好きな女子大生。
身の安全のため男装をして、
ミレーユの村で書物整理の
仕事をしている。

1 色は直感で選びましょう

山間にあるミレーユの村は、秋が深まるのが早い。麓の町の木々が煙ったような深緑色に変わり始める頃、村を囲む森はすでに赤や黄の鮮やかな色が混じり始める。

その森の中を歩くと、草の上の落ち葉がかさかさとした乾いた音を立てた。

「あ……綺麗な木の実」

落ち葉の上に鮮やかな赤い実が落ちてるのが見え、私はしゃがんでそれを拾う。小さくて外皮の硬い、クリスマスリースの飾りなんかでありそうな真っ赤な実だ。

うん、これも十分髪飾りの材料に使えるそう。その傍に咲いている薄桃色の花も可愛い。続けてその花も摘み、小さく微笑む。

すると、数歩先で花を摘んでいた村娘のティナが振り返った。

「あら、ソーマ先生。その花ならあっちにもっといっぱい咲いてたわよ」

「あ、そうなんです。ありがとうございます。では、あちらも探してみます」

お礼を言い、私はゆつくりと腰を上げる。見れば、ティナを含めた三人の少女たちが、色とりど

りの野花を腕いっぱい抱えていた。

白や薄桃、水色——薔薇や葎に似た、けれど微妙に色や形が異なる花たち。漂う香りも、記憶の中にあるそれらとはわずかに違っていた。そうしたささやかな違和感が、この世界が元いた世界とは違うのだと私に知らしめる。

「先生、どう？ 綺麗でしょ」

ティナが百合に似た白い花を腕いっぱい抱えたまま、得意げにこちらを振り返る。

「ええ、とてもお綺麗ですよ。あなたには白がよく似合いますね」

「やだ、私じゃなくて、この花のこと」

「あ、そちらでしたか……」

おかしそうにくすくすと笑われ、私は恥ずかしくてぼりぼりと頭を掻く。

彼女の茶色い髪に白がよく映えて似合っていたから、早合点してしまった。

そんな私に、ティナがはにかんだ表情で首を振る。

「ううん。……けど、ありがと。お祭りの当日は、もつと綺麗になってみせるから見てね」

そう。もうすぐ村の祭り——豊稷祭が始まる。秋の実りを祝うそのお祭りで、自らを彩る髪飾りを作るため、彼女たちはこうして野花や木の実を摘んでいるのだ。

* * *

申し遅れたけれど、私の名前は、相馬智恵。

元々は日本で就職活動の日々を送っていた、ファンタジー小説好きの冴えない女子大生だ。

それが、ある日の面接の帰り道、突然真っ黒い穴に落ちたかと思ったら、異世界にトリップしてしまった。

——異世界に行ってみたいと思ったことは何度もあったけれど、まさかそれが自分の身に起きるなんて。最初は、そんな風に驚き戸惑った。

どうやらトリップしたのは森近くの草原だったらしく、見えるのは鬱蒼とした緑ばかり。

灯りもないから、このまま暗くなったらいずれ身動きが取れなくなるだろう。悪くすれば、野生動物やならず者に襲われる可能性だってある。

それに、ここが日本とは違い、危険性が未知数の世界なのだとしたら……異世界人で、それも女だと知られたら、さらに危険が増すだろう。異世界トリップ小説をいくつも読み漁ってきた知識を総動員して、そんな結論に至った。

そうして、私は男の学者の振りをすることにしたのだ。

異国から来た風変わりな学者だと周囲に思わせておけば、多少この世界の常識が抜けていたりおかしい行動を取っていたりしても、なんとか納得してもらえらるうと考えて。

幸い、女性にしては高めの身長と凹凸の少ない身体つき、それに短い髪型をしていたことで、変装するのは簡単だった。

そして、色々あったのち、このミレーユの村に腰を落ち着けて、二週間。

青緑色のチュニツクにズボン、そして頭に巻いた同色のターバンという、この世界の男性の格好をした私は、学者『ソーマ先生』として生活している。ちなみに、村長さんから請け負っている書庫整理が主な仕事だ。

ティナの隣で花を摘んでいた栗毛の少女が、ふと手を止め思い出した様子で尋ねてくる。

「ソーマ先生。そういえば、マチルダさんの家に行くんじゃないかなかった？」

「あ、そうでした。つい時間が経つのを忘れてしまっていました」

慌てて花を握っているのは逆の手で膝についた土を払い、さっと身支度を整える。

マチルダさんは、私がこの世界に来て初めて出会った女性だ。母と同年代で染色師をしており、きつぷが良い。

私は彼女の案内でこの村に来た。それ以降、マチルダさんは親身に相談に乗ってくれるようになったのだ。彼女の家は私の家とは逆方向で、村の東側にある。

昨日訪ねたときは留守だったので、今日こそはと向かったところ、途中にある森の小道でティナたちが花を摘んでいるのを見かけた。それを手伝っているうちに、熱中して結構な時間を過ごしてしまったというわけだ。

少し離れた場所にいた赤毛の少女が、橙色の花を摘みながら頷く。

「先生、材料集めに夢中だったものね。お祭りのこともなんだかすごく気になってるみたいだし」

「ええ……この村に来て初めて迎える催し物ですから。皆さんが準備しているのを拝見しているだけでも興味深くて、楽しいです」

そうのんびりと答える。基本的にこの世界で見聞きするあれこれは、私にとってすべて新鮮だ。ちなみに今いるこの世界は、よくあるファンタジーのように魔法が存在する世界ではなく、騎士道精神が浸透している、剣の世界だ。中世ヨーロッパによく似ている。

私自身はよくわからないチート能力で、言葉が通じたり文字を読めたりしているけれど、基本的には超常的な力の存在しない、ある意味現実的な世界と言えた。

その一方で、獣のいなくなった森を『精霊の森』と呼んだり、その森に住む鳥を《精霊の御遣い》と呼んだりと、神秘的な風習が人々の生活に息づいていて、遠い国のお伽噺のように感じることもある。

それはさておき、今はマチルダさんだ。

特に訪問の約束をしていたわけではなかったけれど、彼女の家事や仕事の都合を考えて、できるだけ早い時間に用事を済ませておきたい。私は少女たちに向き直る。

「ありがとうございます。皆さん。よろしければ、またお時間のあるときにもお手伝いさせていただきます」

「もちろん。あ、でも今度はメアリーと一緒にいるときじゃないと駄目よ」

「そうそう。じゃないとあの子、きつと膨れちゃうから」

快く頷いた少女たちが、顔を寄せ合い意味ありげにふふつと笑う。

うん？ どうしてここでメアリーが出てくるんだろう。私はきよんととして首を傾げる。

メアリーは、書物整理の仕事を手伝ってくれている十四歳の少女だ。金茶の長い髪に緑色の瞳が

印象的で可愛いが、少し勝ち気で不器用なところがある。

そんな彼女が、こうして少女たちと私が一緒にいるだけでなぜ膨れるのだろう。そう思い、口を開こうとしたとき、道の向こうから足早に歩いてくる人影が目に入った。

——噂をすれば、メアリーだ。

「あら、やっぱり先生の気配を嗅ぎつけてきた」

「さすがメアリー。先生に関しては目ざといわね」

少女たちが感心したように腕を組み、うんうんと頷く。まるで鼻や目の利く野生動物みたいな言われようだ。

その表現に内心で苦笑しながら、私は目の前まで歩いて来たメアリーに声を掛ける。

「メアリー、こんにちは。昨日はありがとうございました」

ほぼ毎日助手をしに家に来てくれるけれど、今日顔を合わせるのはこれが初めてだ。それに、昨日彼女はマチルダさんへのお使いを頼まれてくれたので、そう挨拶する。

「うん、大したことない。……それより先生たち、ここぞなにしているの」

メアリーは後ろの少女たちが気になるようで、少しだけ拗ねた感じで言いながら、ちらちらと視線を向けている。

考えてみれば、ティナたちよりも二歳ほど年下とはいえ、彼女も年頃の少女だ。

もしかしたら、自分も村のお姉さんたちと一緒になにかしたのかもしれない。

そう思い、穏やかな口調でそっと誘ってみる。

「村のお祭りを使う、髪飾りの材料集めをしていたところです。私はそろそろお暇するところなのですが、よろしければメアリーも、ティナたちと一緒に花を摘んでいきませんか？」

「先生が帰るなら、別にしなくていい」

うーん……人見知りしたのだろうか。固い表情の上、にべもない返答だ。

そんなメアリーに、ティナがお姉さんらしく話し掛ける。

「あらメアリー、せっかくだから作っておいて損はないわよ。あなただって豊穰祭に出るんですよ」
「でも、今から花を摘んで髪飾りを作っても、祭りの日には枯れちゃうのに」

少女たちの手にある花を見ながら、メアリーがどこか釈然としない様子で口にする。

祭りは一週間後に開催されるので、確かに今作っても花がもたない。そのことに、私は今気がついていた。

すると、赤毛の少女がちゅちゅと人差し指を振る。

「もちろん、今から花冠や花飾りを作っても枯れちゃうわ。これは試作品用よ。どんな組み合わせで花を編むか決めておかないと、当日慌てちゃうでしょ」

「……そうなんだ」

メアリーが短く答える。元々口数がそう多い子ではないけれど、今日はさらに遠慮がちというか、ちよつと固い感じがした。

そもそも、不器用な性格から、村の同年代の子供たちとは距離を置いていた子だ。以前よりも雰囲気柔らかくなり、こうして世間話ができるまでになったとはいえ、まだ慣れないのかもしれない

ない。

もう少し彼女たちの距離が縮まればいいのだけれど……

ふと、握っていた右手の花が目に入り、私はとっさに思いついたことを口にする。

「そうだ、メアリー。少しの間だけ俯うつむいてももらってもよろしいですか？」

「……？ いいけど……」

不思議そうにしつつも、メアリーは言われるまま顔を俯うつむける。そんな彼女の髪に、私はさつき摘つんだ薄桃色の花をそっと挿さした。

彼女の髪はウェーブがかつているしボリュームもあるので、簡単には落ちないだろう。

「え……先生、これ」

メアリーが弾かれたように顔を上げ、髪に片手を触れる。驚いたのか、緑色の瞳が大きく見開かれていた。

あ、思った通り可愛い。そう考えながら、私はのんびりと微笑む。

「明日には枯れてしまうかもしれませんが、あなたに似合いそうな可愛らしい花でしたので。もしお嫌でなければ、今日一日つけて頂けたら嬉しいですよ」

「そんなわけ……嫌なわけではない」

メアリーは緑色の瞳を揺らし、ぶんぶんと首を横に振った。そんなメアリーの額ひたいを、傍にいた栗毛の少女が小突く。

「あらメアリー、よかつたじゃない。ちなみにその花の花言葉、知ってる？」

「知らない。お願い、教えて」

さつきよりも真剣な表情で、メアリーが少女に向き直る。

良かった。なんだか打ち解けてきたようだ。活き活きとしたメアリーの様子に、私はほっと胸を撫なで下ろす。

少女たちも、いつも不愛想なメアリーが食いついてきていることが嬉しいらしく、時折からかいつつも楽しそうにしている。

それを見ていると、私まで嬉しい気持ちになる。

そうして私は、少女たちの語らいを邪魔しないよう、小さな挨拶あいさつとともにその場を後にしたのだった。

少女たちと別れると、当初の目的だったマチルダさんのお宅に向かう。

見慣れた青い屋根の玄関先に近づくと、彼女の恰幅かっぶくの良い姿が見えた。傍に誰かが立っている。

どうやらマチルダさんは玄関前で村の女性——バーサさんと立ち話中たちわのようだった。今日はやはり女性陣と縁のある日だ。

バーサさんは井戸端いどばたで初めて会って以来、マチルダさんと同様にかと私の世話を焼いてくれる。今ではだいぶ気心が知れていて、気軽に声を掛けることができる仲になった。

「こんにちは。マチルダさん、バーサさん」

「おや、ソーマ先生。数日振りじゃないか」

バーサさんが振り返り、ちよつと目を見開く。淡い金髪と鷲鼻が特徴的で、どことなくロシア系を思わせる風貌の中年女性だ。

二人とも、いつもと同じ茶や紺の落ち着いた色味のブラウスとスカートに、白い前掛けをつけている。この村の女性は、このような質素な服装が標準らしい。

バーサさんの向かいに立っているマチルダさんも、私の姿を認めて朗らかに声を掛けてくる。

「いいところに来てくれたね、先生。頼まれてた鴨はちゃんと仕上がってるよ」

「ありがとうございます。すみません、急にお願ひしてしまつて」

昨日まで我が家には二人の旅人が滞在していた。寡黙な美青年のハイルと、やんちゃで弟のようなジャック。そのジャックからもらった鴨を捌いてくれるよう、メアリー経由でマチルダさんにお願ひしていたのだ。

肉を処理できるような刃物を持っていなかったし、そもそも私には、野生動物を解体する知識や技術がない。本当は今後のことも考えてやり方を習っておきたかったが、今回は時間がなかったのだ、すべての処理を任せていた。

私が感謝を込めて頭を下げると、マチルダさんは手を振ってからりと笑った。

「なーに、大したことじゃないよ。駄賃に立派な鴨を一羽もらえて、あたしの方こそ儲けものさ」

鷹揚で気持ちのいい彼女の言葉に、私の顔にも自然と笑みが浮かぶ。

「本当は捌き方を教えて頂こうと思つたのですが、急な用事が入つてしまひまして」

「おや、そうだったのかい。じゃあそれはまた今度教えようかね。なに、慣れりゃあそんなに難し

いものでもないんだよ」

そんな私たちの会話に、バーサさんが加わってくる。

「ああ……用事と言えば。聞いたよ、ソーマ先生。なんでも昨日、酒場で酔っぱらつた傭兵をやつつけたんだつてね。やるじゃないか」

「へえ、そうなのかい？ すごいねえ、先生！」

「えっ!? あ、いえ、私じゃなくて、正しくは一緒に酒場にお邪魔した剣士の方なんです、場を収めたのは」

「なんだか事実と違つた噂が出回っているらしく、私は慌てて訂正する。」

実際、酒場で横暴な振る舞いをしていた傭兵を取り押さえたのは、一緒にいた旅の剣士——ハイルだったから。

涼しげに整つた彼の容貌を……そして、それ以上に胸に刻まれた彼どのやりとりを思い出し、胸が小さく跳ねる。傭兵に斬りかかれそうになつたところを彼に助けられて以来、どうも胸の辺りがおかしいのだ。時々、ちくりと痛んだりもする。

やっぱ傭兵に突き飛ばされたとき、どこかにぶつめたのかなあ……。私は首を傾げ、そつと胸を撫でさする。

すると、バーサさんはゆるりと首を振つた。

「けど、その剣士さんを連れて行つたのはソーマ先生だろう？ なら先生の手柄でもあるつてことさ。ティナが助かつたつて、酒場の女将が何度も言つてたよ。いいことしたじゃないか」

あくまで私のことも評価しようとしてくれるらしい。

これ以上否定するのもかえって失礼に当たるだろうと思ひ、後半の部分で静かに頷く。

「ええ……そうですね。彼女が元気になってくれて、本当に良かったと思います。若い娘さんにとつては不愉快極まりないことですから」

すると、事情を知らないマチルダさんが首を傾げて尋ねてくる。

「なんだか穏やかじゃないねえ。一体なにがあつたんだい？」

「ああ、なんでもその傭兵は、酒場の看板娘のティナに酌をさせて、挙句の果てに身体を撫でくり回したんだそうだよ。嫌がるのを何度もね」

「おやまあ、そんなことがあつたのかい！ やだねえ……」

マチルダさんが眉を顰める。それに頷き、バーサさんが吐き捨てるように言う。

「しかも昨日聞いた話じゃ、他の村人たちにマムルト山の魔物を退治して貰って大口叩いてたらしいけど。村でもこんなありさまじゃ、山に登つたつて魔物にすぐにやられる始末だろうよ」

「ああ、傭兵はそれが目的でこの村を訪れていたんですね……」

そうだろうとは思っていたが、改めて納得して頷く。

このミレーユの村からほど近いマムルト山に凶暴な魔物がいるというのは、村で最近よく話題にのぼる話だった。

魔物というのと、ファンタジー小説好きな私はグリフォンやガーゴイルのような幻想的なモンスターを想像する。けれど、魔法がないこの世界では、どうやら凶暴な獣を指すようだ。

村人の何人かがその魔物に出くわし、怪我をしたり驚いて逃げ帰つたりしたらしい。それゆえ、話を伝え聞いて腕試しに山に登る猛者もいるのだとか。

件の酔っ払い傭兵も、どうやらその一人だったということか。

それにしても——バーサさんの様子を見るに、あの傭兵に対しての村人たちの心証はだいたい悪くなっているようだ。

それに、この村の噂の広まる速度とネットワークはすごいなあと、変な部分に感心してしまう。それだけ村人同士の繋がりが密接な証なのだろうけれど、自分におかしな噂が流れたときのことを想像すると、ちよつと戦々恐々する部分もある。

「まあ魔物つたつて、あたしも噂でしか聞いたことはないけど。恐ろしい姿らしいから、あの間抜けな傭兵だつてきつと腰を抜かして——」

バーサさんの台詞がふいに途切れる。彼女は、素朴な家がぼつりぼつりと立ち並ぶ道の向こうから歩いてくる男性に目を向けていた。

四十代くらいのひよろつと痩せ細つた体型の男性で、私は初めて見る顔だ。

同じように視線を向けたマチルダさんが眉を上げる。

「おや、丁度いい。イアンじゃないか」

「イアンさん？ ……ああ。確か、魔物を見たつていう方でしたっけ」

前に井戸端の女性に聞いた話をなんとはなしに思ひ出し、そう言う。すると、今度は隣のバーサさんが頷く。

「そうさ、魔物に出くわした数少ないうちの一人だね。……おい、イアン！ あんたが見たつていう魔物についてちよつと聞かせてくれないかい！」

バーサさんの呼び声に気づき、イアンさんがこちらに視線を向けた。見ればひどく顔色が悪く、うろろうと視線を彷徨わせ、落ち着かない様子だ。

彼は一度逡巡した様子を見せてからこちらに近寄ってくる、ぼそぼそと呟いた。

「お、俺は……ちらつと魔物を見たつてだけだ。大したことは知らねえし、関係ねえ。……そういうのは他の奴に聞いてくれ」

それだけ言い、彼はそそくさと去つて行く。気弱さと神経質さが同居したような印象の男性だった。

そんな反応が返ってくることを予測していたのか、バーサさんは呆れたように肩を竦めてその後ろ姿を見送っている。

「全く、相変わらず陰気な男だねえ……。あれでも腕のいい養蜂家なんだけどね」

「へえ、イアンさんは養蜂をされてるんですか」

「そうさ。マムルト山にもいくつか蜂の巣箱を置いてるからね。それでよく山に登ってるんだよ」

「なるほど……そこで魔物に出くわしたというわけなんですね」

少しづつ話が見えてきて、私は一人頷く。

話が丁度途切れたところで、バーサさんがやや日差しが傾き始めた空に目をやり告げる。

「さて、夕餉の支度もあるから、あたしはそろそろ帰らせてもらおうよ」

「あ、はい。さようなら、バーサさん」

「またね、バーサ。今日は来てくれてありがとうだよ」

「なんでもないさ。マチルダも先生も、また今度ゆっくりお話しておくれ。じゃあね」

バーサさんはゆるりと手を振り、自宅の方角へと去って行った。

その姿を見送り終えると、マチルダさんが私に声を掛けてくる。

「さて先生、それじゃあさつそく鴨を渡すでしょうかね。ちよつと見てもらいたいものもあるし、家の中へ入っておくれ」

「はい、ではお邪魔します」

見てもらいたいものつてなんだろうと思いつつ、私は気心知れたマチルダさんの家の中へと足を踏み入れたのだった。

マチルダさんの後に続き台所へ入ると、そこには処理された鴨が三羽、調理台の上に並べられていた。

羽はむしり取られ、首や手足は切断されており、白っぽい薄桃色の肌を見せる肉の塊になっている。見慣れた食材の姿になっていたそれに、ほつと息を吐く。ここからなら私でもなんとか調理できそうさ。

「傷まないよう、塩漬けにしてあるよ。あたしの分は燻製にでもしようかと思つてね。もし良かったら、ソーマ先生のもそうするかい？」

「よろしいのですか？ できましたら、私の分もお願いします」

一人で三羽は多かったたので、実を言えば保存が心配だった。

火を通してのももって数日だろうし、この世界には冷蔵庫や冷凍庫のような便利なものはないから、すぐ腐ってしまう。

加熱して、あとは傷まないうちに近所にお裾分けしようか思案していたが、長期保存に適した状態にもらえるのであればありがたい。

「わかったよ。じゃあこれは預かっておくれね。早けりや明日には渡せると思うよ」

「ええ、すみません。助かります」

胸を撫で下ろし、お礼を言う。マチルダさんは燻製の前準備なのだろう、奥から持ってきた大きな桶に鴨をすべて入れると、私の方へと向き直った。

「さて、じゃあ鴨はこれでいいとして、今度は別のを見てもらっつていいかい」

「あ、はい。なんでしよう」

「ちよつと待つてておくれね」

なぜか、ふふつと楽しげに笑い、マチルダさんが前掛けで手を拭きながらまた奥に消える。

そして戻ってきた彼女が持っていたのは、三着のワンピースだった。——いや、この村の人たちが通常着ているものより鮮やかな色で飾りが多いので、これはめでたい日に着る晴れ着のようなものなのかもしれない。

私の心中の疑問に答えるように、マチルダさんが説明してくれる。

「これはね、あたしが若い頃に着てた、村の祭り用の晴れ着なんだよ」

「へえ……綺麗ですね。それに花の飾りもついていて、とても可愛らしいです」

「だろう？ もし良かったら、これを今度の豊穰祭でメアリーに着せたいと思つてね。祭りじゃあ、若い衆はこういう服を着て、気になる相手と踊るのが習わしなもんだから」

「ああ、なるほど……」

先ほどいそいそと花を摘んでいたティナたちの様子を思い出し、納得して頷く。

どうやら豊穰祭は、若い男女が恋の相手を見つける場でもあるらしい。だから少女たちは、準備段階からあんなに熱が入っているのか。

そして当日ともなれば、髪を花で飾り、目の前にあるような衣装でさらに着飾つて——

鮮やかな生地に花の飾りや刺繍が施されたそのワンピースは、ヨーロッパの民族衣装を思わせる意匠で、白色人種系のこの世界の人たちが着たら、とても映えそうだ。

感心して見惚れる私に、マチルダさんが楽しげに口を開く。

「それでね、どれがいいか先生に選んでもらおうと思つてさ」

「私が選んで良いのですか？」

当事者であるメアリーでなくて良いのだろうか。思わずきよんととして尋ねると、マチルダさんはふふつと笑う。

「いいんだよ。メアリーは自分で選ぶより、先生が選んでくれた方が嬉しいだろうからね」

「ええと……そういうものなのでしょうか」

「そういうもんなんだよ、乙女心つてやつはね」

私も一応は二十代の乙女なのだけれど、とりあえずそういうものなのかと思うことにする。

自分だどどの服がいいか迷っちゃうけど、店員さんがおすすめてくれたものなら、なんか安心！ そんな感じだろうか。

女子力が低い私は適当にばばっと決めてしまおう性質だけれど、まだまだ若いメアリーなら、そういう傾向があるのかもしれない。ならば是非力になりたいと思う。

それに彼女が晴れ着姿になったところを想像すると、年の離れた妹の七五三姿を見るような感じがして、なんだか微笑ましくなる。

「そうですね……」

三着あるワンピースは、左から鮮やかな赤、清楚な雾囲気の水色、森のように深い緑の三色だった。うーんと悩む。

メアリーのやや苛烈な性格を考えると、赤も似合うとは思う。

湖の色に近い水色も、水面に足を遊ばせていたメアリーの姿に重なり、彼女を引き立てるだろう。けれど……私の目を捕らえて離さないのは、森のように深い緑色のワンピースだった。

年頃のお嬢さんが着るにしては、やや落ち着き過ぎた色合いかもしれないが、彼女の緑色の瞳に最も映えるのはこの服だと思ったのだ。なにより、この色は森に生きる彼女にぴったり合っているように感じる。

私は緑のワンピースを手に取り、マチルダさんに答えを返す。

「もし私が選ぶとしたら、この深緑のものでしょうか」

「これかい？」

「ええ。どれも素敵なのですけれど、これを着たらメアリーはきつとさらに可愛らしくなると思います」

いつものように目の端を赤く染め、不器用ながら嬉しそうにしている彼女を思い浮かべ、つい頬が緩む。そんな私を見て、マチルダさんが快活に頷いた。

「よし！ じゃあ決まりだね。祭りの日まで、これはちゃんと仕立て直しておくよ。もちろん、着るかどうかメアリーに確認してからだけだね」

「あれ？ そのまま渡すのではないのですか？」

「いいや。あたしの若い頃と今のメアリーとじゃ、だいぶ体型が違うからね。丈や幅を詰めないと、きつとずり落ちちまうよ」

「ああ、なるほど」

マチルダさんは多分若い頃も胸回りが大きかったのだろうし、メアリーは年頃の少女に比べて瘦せぎすと言って良いほど細身だ。

「先生も、晴れ着の準備が必要ならいくらでも相談に乗るよ。祭りは若い衆のものだからね。先生だって主役なんだから」

「いえ、私はお気持ちだけで十分です。皆さんの楽しんでいる様子を見られれば、それで満たされますから」

微笑んでやんわりと断る。若い人たちの恋の鞘^{さや}当^{あた}ての場ならば、尚更、男装している私が出てはいけないと思った。踊る相手が見つからない少女が、たまたま私の相手に割り当てられてしまったら可哀想だ。

だが、マチルダさんはなぜか残念そうだ。

「本当に出ないのかい？ 踊りも？」

「ええ。祭りでは色々準備も大変でしょうし、裏方に徹したいと思います」

祭りだと、きつと常よりはしゃぐ人も多いだろう。お酒を飲んで倒れる人や、怪我をする人だつて出てくるかもしれない。

それなら祭りの様子を楽しく眺めつつ、救護班みたいなお手伝いができればいいと思う。

「そうかい……。気が変わったら、いつでも言っておくれよ。うちにはダグラスの昔の晴れ着だつてあるんだからね」

なぜか何度も念を押すマチルダさんを、内心不思議に思い、首を傾^{かた}げる。

多分気が変わることはないだろうけれど、彼女の厚意を無下にするのも憚^{はばか}られたので、微笑んで答えた。

「ええ。そのときはどうぞお願いします」

そして、祭りの話が一区切りついた頃。

「ああ、そーいやさっきのバーサとの話だけど……」

ワンピースを近くのテーブルの上で畳みながら、ふと思いついたようにマチルダさんが顔を上げた。

「確か旅の剣士さんだっけね、酒場でティナを助けてくれたつてのは」

「あ、はい」

「そんな人がいつの間にか村に来てたんだねえ。あたしゃ、ちつとも気づかなかったよ」

マチルダさんが首を傾^{かた}げる。

村人の中でもフットワークが軽く、様々な場所に顔を出す彼女からしてみれば、いつの間にと疑問に感じる部分があるのだろう。

「多分、マチルダさんだけでなく、他の皆さんも気づいていらっしやらなかったと思います。

彼——剣士のハイルさんとお連れの方は弓士のジャックさんと仰^{おっしゃ}るのですが、お二人がいらしたのは一昨日の大雨の晩のことでしたから」

「ああ、つてことは、雨宿りにでも来たのかい？」

「ええ、そのような感じですよ。私の家の明かりが一番に目に入ったらしくて」

「そうかい、風邪をひかなかったんなら良かったねえ」

マチルダさんがのんびりと嬉しそうに言う。

いや、片方は思いつきり熱を出していたんだけど。心の中でそうつつこみつつ、ジャックの名誉のためにそこは触れずにおく。

「それにしても弓矢を扱うのかい、そのジャックさんて人は。まるでメレルの騎士みたいだねえ」

ふふつと楽しみに笑うマチルダさんの言葉が、なんとなく気になって尋ねる。
「メレルの騎士？」

うん？ なんだかメレルって、どこかで聞いたことがあるような……

「ほら、前にニコラスさんが言っていたじゃないか。最近名が知られるようになってきた騎士の一人、『狩人ジャック』のことよ。」

「狩人……ああ！」

この村に向かう途中の森で出会った行商人のニコラスさんが、そんな話をしていたっけ。

この国には、中央を守る近衛騎士団とは別に、四つの騎士団があるらしい。東西南北に置かれた騎士団のうちの一つが、確かメレルという名前だった気がする。

言われてみれば、弓を構え獲物を射ていたジャックと妙に印象の被る通り名だ。

よくある名前なのであまり気にしていなかったが、確かに面白い偶然の一致だと思う。

だからと言って、旅の傭兵紛いのことをしているジャックがその騎士本人のはずはないだろう。けれど、興味を引かれてさらに尋ねてみる。

「確か、他にも通り名を持った騎士がいるんですけどっけ？ ええと……」

こう、なんとなく強そうな通り名だった気がするが、何分二週間以上前のことなのではっきり思えない。

マチルダさんは顎に手を当て、天井付近を見つめながら言葉にする。

「他は……そうだねえ。英雄って言われてる『金獅子レオン』は別格としても、あと最近とみに名

が知られるようになったのは『剛腕ウォーレン』に『死神セス』あたりかねえ」

「……え？」

また聞き覚えのある名前が出てきて、一瞬思考が止まる。

ウォーレンに、セスって……

ニコラスさんからこれらの名前を聞いたときは、そういう人たちもいるのかとただ聞き流していたけれど、今は違う。

その二人の名前は、ハイルとジャックの口から聞いていたから。だから、あるとき妙に耳に覚えがあるような気がしたのかと納得する。

マチルダさんは胸の前で腕を組むと、感心したように頷きながら続けた。

「ウォーレン以外はまだ若い衆だと言ってうんだから、大したもんだよ。騎士になるだけでも大変だったのに、こんな若いみそらで大きな手柄まで立てて」

「そうなのですね……」

いつの間にか、胸の鼓動が速くなっていた。

話し続けるマチルダさんの声が、どこか遠くで聞こえる。

まさか……いや、そんなはずはない。だってジャックもそうだし、セスもウォーレンもそんなに珍しい名前ではないはずだ。けれど、でも……

声が掠れそうになりながらも、私はマチルダさんに尋ねる。

「あの……もしも、もしもなのですが。その『狩人ジャック』と『剛腕ウォーレン』、あと『死神

セス』と一緒に旅をしていたとしたら……」

おそろおそろの口にした私に、マチルダさんは目を瞬かせた後、破顔した。

「あはは、先生も面白いこと言うねえ！ そりゃないよ、そんな目立つ三人衆がいたら見てみたい気もするけど。なんだって、その人たちはみんな所属する騎士団が違うからね」

「え？ 騎士団が違う？」

あれ？ 予想と違う答えが返ってきてちよつと戸惑う。

「そうさ。『狩人ジャック』は西のメレル騎士団、『剛腕ウォーレン』は北のガリマー騎士団。それに『死神セス』は、あたしたちがいるこの領を守る、南のイスカ騎士団の騎士だからね」

マチルダさんはゆるりと手を振って続ける。

「騎士団の砦だって、北に南にと、国の端々に離れてるんだ。そんな真逆の方角に住んでる人たちが一緒に行動するなんて、そんなことはあるはずがないよ。騎士団は独立した組織だからね」

それに、とマチルダさんは続ける。

「第一、騎士様つてのは、騎士団の砦から滅多に出てこないものなんだ。あたしら村の衆が、そうそう姿を拝めるような人たちじゃないんだよ」

「あまり表に出ないのですか？」

「ああ。あの人たちが出てくるのは、大きな戦やら討伐やらの王命が下ったときぐらいいさ。領地でなにか大きないざこざがあれば出てくることもあるけど、基本的には騎士団の砦で鍛錬に励んでるものだからね」

「つまり、騎士というのは、あくまで王命に殉ずるものなのですね」

「そういうことさ。まあ、先生が言うように、所属の違う騎士が連れ立って行動することがあるとしたら、よつぽどの事件が起きたときなんだろうとは思うけどね」

マチルダさんがそう締めくくる。

なるほど、この世界の騎士つてそういうものなのか……。初めて耳にすることに、素直に驚く。

結構身近な存在なのかと思っていたが、だいぶ遠い存在というか、高嶺の花のようなものらしい。

だからこそ、民衆は彼らに憧れ、熱く語ったり姿絵を買ったりするのだろう。

あれ？ そういえば、あのととき見た姿絵……

ふと脳裏に浮かんだのは、ニコラスさんに見せてもらった、小さな肖像画とも言える姿絵だった。

「金獅子、レオン……？」

ほのかに思い出した姿絵の金髪碧眼の青年の姿は、まるで――

「さーて！ 随分話しこんじまったが、そろそろ夕餉の支度をしないとまずい時間だね」

思考に沈み込む私の前で、今の時刻が気になり出したらしくマチルダさんが話を切り替える。

「ああ、そうだ。どうだい先生、鴨のうち一羽は燻製に回さないで、すぐ食べられるようあたしが

簡単に料理しようか？」

「あ……は、はい！ 是非お願いします」

マチルダさんに声を掛けられ、はっと我に返り、慌てて返事をする。

今なにか、重要なことを思い出しかけたような気もする。けれど、鴨に気持ちが悪われた私は、

ひとまずそれを頭の隅に追いやった。

* * *

その後マチルダさんに鴨かもを使った簡単なスープを作ってもらい、それが入った鍋を持って、私は帰路についた。

マチルダさんと家に帰ってきたダグラスさんに、良かったら一緒に晩御飯を食べていかないかと誘われたが、いつもご馳走になるのは悪いので遠慮した。

両手に鍋を持ちながら、なんとか指を使って玄関の扉を開け、そのまま鍋を台所に持っていく。一人住まいの小さな調理台の上にそれをとんと置くと、ぽつりと呟つぶやいた。

「騎士かあ……」

頭の中を占めるのは、マチルダさんから教わった鴨料理のレシピではなく、その前に聞いた騎士の話だった。料理を作っているのを横で見ている間も、実は妙に頭から離れなかったのだ。

もしかしたら、ジャックたちはあの有名な騎士なんじゃないか、なんて。

だが、そんなことがあるはずもない。

確かに、よくある名前というのを差し引いても同じ名前の人たちがこうまで揃うのは珍しい。けれど、各々所属する騎士団の皆みなに籠かごり、日々鍛錬いそに勤しむという騎士たちの内情を考えると、彼らが同一人物と考えるのは少々無理があった。

そもそもこうして騎士団を離れて旅をしている時点で、規律違反になってしまっているのではないだろうか。

そう思うのに、それでも、もしかしたら……なんていう気持ちが消えないのはどうだろうか。

彼らの正義感溢れる人柄のせいだろうか。金で動く傭兵と言ってしまうには、彼らは清廉せいけんでどこか澄んだ空気を纏まとっていた。

私利私欲で行動するのではなく、己おのれの志しで動くような……。そこまで考え、小さく苦笑して首を振る。

「……ハイルのこともジャックのこともよく知らないのに、私はなにを考えてるんだろう。……夕飯食べよう」

調理台の上に置いた鍋を見れば、だいぶ湯気も消え、程よく冷めているようだった。

戸棚から底の深い皿を一枚取り出し、木製のお玉でスープを掬すくってそれに盛りつけていく。マチルダさんお手製の、鴨肉かもと野菜がどっさり入った食べ応え十分なスープだ。

窓の外に目を向けると、いつの間にか紺碧こんぺきに染まった空に小さな星が点々と浮かび、夜の訪れを告げていた。それはいつもと同じ、静かで穏やかな一日の終わりだった。

——そんな穏やかな日常を脅おびやかす事件は、翌日、唐突に起こったのだった。

2 無体な要求には立ち向かいましょう

翌日の朝。目覚めるとなんだか外が騒がしかった。今私が住んでいる家は村の外れにある。周りに樹がまばらに生えているくらいで、他の家々が近くにないため基本的にいつも静かだ。

なのに、今日は家の前を人が慌ただしく通り過ぎる気配や、話し声が扉越しに聞こえてくる。わずかに聞こえるその声は、どうも穏やかな感じではない。

「なんだろう……？」

胸騒ぎを覚え、朝食を食べていた手を止める。

今日の朝食は、昨日マチルダさんに作ってもらった鴨肉のスープに黒パンだった。持っていた木製のスプーンをテーブルの上に置くと、椅子から立ち上がる。

そして玄関まで行き、そっと扉を開け、外の様子を窺った。

多分先ほど家の前を通り過ぎただろう人影は、今は小さく見える。方角から言って、村長さんの家に向かうところなのかもしれない。

他にも、やや離れた道を足早に通り過ぎる村人の姿が見える。その人が向かっているのは、村の入り口がある南の方向のようだ。さっきの人とは真逆の方角になる。

朝の清々しい青空の下、緊迫した様子の村人たちの姿は、どこか異様に感じられた。

「うーん……祭りも近いから、なにかその準備でもしてるのかな」

それにしても活動する時間が早すぎるし、様子がおかしいようにも感じたが、それ以上はわからない。

首を捻り、ドアノブに手を掛けて家の中に戻ろうとした、そのときだった。

「先生！」

南側に伸びた道の向こうからメアリーが駆けてくる。彼女がこんなに朝早い時間に我が家を訪れることなどなかったので、驚いて目を見開く。

「メアリー、どうしたんですか？ そんなに焦って」

「大変なの！ あのとときの傭兵が、村の入り口に来て……」

「傭兵って……まさか、あのととき酒場で暴れていた……？」

彼女の緑色の瞳を見返し、思わず息を呑む。

「そうなの、今日は仲間を引き連れて来てるの！」

メアリーが怯えて叫ぶ声に、瞬時に私の頭の中を考えが駆け巡る。

——そうだ……ハイルはここを去るとき、なんと言っていた？

あの傭兵が仕返しにくるかもしれない。そう言っていたのではなかったか？

仲間を引き連れてこの村を訪れているのならば、その理由はきつと——

気がつけば、玄関の扉を開け放して駆け出していた。そして後ろを振り向き、声を張り上げる。

「ちょっと出てきます！　メアリー、あなたは念のためここで待っていてください」
「あっ、先生！」

もしわずかでも危険な可能性があるのなら、彼女を近寄らせてはいけない。
そして私は村の入り口の方向へ走る。何事もないようにと心底願いながら。

息を切らせ、村の入り口に辿り着くと、そこにはすでに人だかりができていた。

彼らが距離を取り、ざわざわと不安そうな目を向けている中心には、あの男——薄汚れた防具を身に纏った中年の傭兵が立っていた。

見れば、傭兵は左腕に怪我をしているらしく、包帯を幾重にも巻きつけている。右腕には、網に入った黒っぽい塊のようなものを掲げ持っていた。

傭兵の後ろには、傭兵というよりも山賊に近い荒々しい雰囲気と身なりの男たちが十名ほどいた。彼らは、にやにやと笑いながら事の成り行きを見守っている。

「ほらよ！　てめえらの頼みを聞いてこうして退治して来てやったんだ。それ相応の礼はしてくれ
るんだろうな」

手に掲げ持っていた網の中の黒っぽい塊を見せ、傭兵はダミ声を張り上げる。どうやらそれが魔物の死骸らしい。対する村人——服装から農夫と思われる壮年の男性は、困ったように眉を寄せた。

「そ、そりゃ……確かに、マムルト山の魔物を退治してもらえりゃ助かるとは言ったけど。そんな、あげられるようなものなんてこの村には……」

「ああん？　俺にタダ働させようって腹だったのか？　俺はこんな怪我までしてわざわざ退治してやったつてのに、いい度胸だよなあ」

これ見よがしに包帯を巻きつけた左腕を見せ、おー痛い痛い傭兵は嘔く。
全く痛そうには感じられない口調だが、包帯の下がどうなっているかわからない以上、農夫はなにも言えないようだ。ただ怯えた声音で続けるように続ける。

「うちの……うちの農作物でよけりゃちょっとは分けてやれる！　どうか、どうかこの件はそれで……」

地に膝をつけ、農夫は傭兵の足にしがみつく。だが傭兵は、彼を振り払うように足で蹴り飛ばした。

「うあつ」

「んなくだらねえもんいるか！　俺がほしいのは金だ、金。報酬だ！」

「ひっ……！」

農夫は、痛みと恐怖のあまり地べたを這いつくばって逃げ出そうとした。

だが、傭兵はそれを許さなかった。農夫の髪を掴み上げると、彼の顔に自分の顔を寄せ、猫なで声で囁く。

「なーに、俺も鬼じゃねえ。なにも金貨百枚も寄せってんじゃねえんだ。五十枚でいいぜ。それで勘弁してやる」

「そ、そんな……そんな大金、村の全財産をかき集めたって……」

「用意してほしいってお願いしてんじやねえよ、俺は。用意しろって言うてんだ……よ！」

「ああああ!!」

言うや否や傭兵は、髪を掴み上げていた手を引っ張り上げた。髪がひきちぎられる痛みにも、農夫が悲痛な声を上げる。周りからも悲鳴のような声が湧き起こった。

目の前で繰り広げられる無体な行動を黙って見ていられるのは、ここまでだった。私は人垣の間を足早に縫い進むと、彼らの前に入る。

「いい加減にしてください。……彼が痛がっています。その手を離してください」

「ああん？」

農夫に向けていた目を私の方に移した傭兵が、眉を顰めた。彼の機嫌が急降下するのを肌で感じる。

「まあたてめえかよ。ひよろひよろした生っちょろい男が、なんの用だっつてんだ」

「その方と、マムルト山の魔物を退治するお話をしたようですが、話を聞く限り、事前に報酬もなにも決めていないただの口約束だった様子」

私は、手が震えそうになるのをぎゅっと握り締めて抑え、傭兵をまっすぐに見つめた。

怯えを見せてはいけない。そして、相手を無駄に刺激してはいけない。

そう心の中で唱えながら、続きを口にする。

「きちんと魔物を退治してくださいとさっさとしても、過度の要求をつきつけ暴力を振るうのは、筋が通っていないのではないのでしょうか」

「てめえはいつもいつも、ぐちぐちとうっせえなあ……」

農夫の髪から手を離れた傭兵は、ゆらりとこちらに寄ってくる。

そして握り拳を作ると、私の頬を殴り飛ばした。急すぎて、避けることも防御することもできなかった。

「……っ……」

地面に身体が叩きつけられる。遠い意識の向こうで、周りの悲鳴のような声が聞こえた気がした。「……い、痛……」

テーブルにぶつけたのとは比較にならないくらい鈍く重い痛みが、一拍遅れて私の左頬を襲う。

ハイルが手当てしてくれた傷も、もしかしたら開いてしまったのかもしれない。肌の表面を血が流れるような感触がする。

だが、なんとか身を起こし、震えそうになる身体を叱咤ながら、私は自分を殴り飛ばした傭兵を見返した。

「……なんだあ？ その文句がありそうな目は」

「文句……ではなく、言い分です。筋が通っていませんし、お話も、まだ……終わっていないので」
本当は、痛い。怖い。歯が震えそうになる。

だが、ただの虚勢だったとしても、今は怯えの片鱗も見せたくなかった。

——ここで私が逃げてどうなる？ 無体な要求を吞まされるだけだ。

それに、この傭兵がこんな暴挙に出たのは、先日の私の対応も影響しているかもしれない。

睨み上げたまま目を離さない私に、興が削がれたのか、傭兵は肩を竦めた。

「こんな面倒くせえ奴に構ってられるか、馬鹿鹿せえ」

そして、地べたに這いつくばったまま頭を抱え怯えている先ほどの農夫と、私たちの様子を見守っている村人たちを見回すと、傭兵は声を張り上げた。

「いいか、ともかく明日の朝までに金貨五十枚を用意しておけ！ 村の財産だろうがなんでも売って、用意しろ。もしもそれが用意できねえってんなら……」

そう言う傭兵は、舌舐めずりして人混みのある一点に目を向けた。そこでは年頃の若い少女が二人、怯えたように身を寄せ合ってこちらを見ている。

「この村の若い女をもらって行く。……そうだな、十人もいりゃいいだろう。これなら用意できねえだなんだって、ふざけたこともほざけねえよなあ」

少女たちが「いやっ」と悲痛な悲鳴を上げた。傭兵だけでなく、その後ろで成り行きを見守っていた男たちも下卑た笑い声を上げる。中にはどの娘を攫っていくか、すでに目星をつけている男もいるようだ。目当ての少女を指差し、いやらしい笑みを浮かべている。

そんな……。あまりに無体な要求に、私の顔が青褪める。

「今日はこれで帰ってやる。いいか、明日の朝だぞ！ ちゃんと用意しておけよ」

そう言い捨てると、傭兵と仲間の男たちは下卑た笑い声を上げて帰って行った。

広場に残ったのは、呆然とそれを見送る村人たちだった。

傭兵たちの姿が見えなくなると、金縛りが解けたようにざわざわとざわめき、各々顔を見合わせ

不安げに囁いている。

その人混みから幾人かが抜け出て、私のもとへと駆け寄ってきた。一番早く駆けて来たのは、以前井戸端でバーサさんと共に出会ったことのあるレナさんだった。

「先生、大丈夫？」

以前は快活な様子を見せていた紫色の瞳は、不安と心配の色に染まっていた。彼女はしゃがみこむと、前掛けで私の頬をそつと拭ってくれる。

その後ろにいる中年女性も私の傍にしゃがみこみ、心配げに眉根を寄せた。

「えらい目にあつたねえ、先生」

「全くだ。あの傭兵崩れが、ひでえことしやがる」

さらに中年女性の横にいる、壮年男性が顔を嚙めて唸っている。揃って心配げな彼らの様子に少し焦り、首を振る。

「あの……皆さん、ありがとうございます。ですが、大丈夫です。見た目ほど痛くはありませんから」

私よりも、あの農夫の方は大丈夫だろうか。彼に目線を向けると、どうやら家族らしい年配の女性と娘に介抱されていた。良かった、とほつと胸を撫で下ろす。

「でも先生、頬が腫れてるわ。ひどいことするわね、あいつ。それに……あんな、あんな馬鹿げた要求まで突きつけてきて……」

私の頬を拭きながら、レナさんが悔しげに声を絞り出す。

三十代の彼女は、あの傭兵が言う若い娘のうちには入らないだろうが、村の仲間が連れ去られるかもしれない事態に強い怒りを感じているのが伝わってくる。

「あ……いけない。血が止まらないみたい」

見れば、私の頬を拭いてくれたレナさんの白い前掛けは赤く染まっていた。それを申し訳なく思いつながら、多少地面に打ちつけた痛みでよろめきつつも、なんとか立ち上がる。

「すみません、せつかく綺麗だった前掛けを汚してしまつて……。あの、本当にもう大丈夫です。あとは家で、冷やした布でも当てていれば治まると思いますから」

「どうやら口の中も切つたらしい。沁みるような痛みを顔に響めそうなのをこらえ、微笑む。

「なに言つてるのよ先生！ 掌だつて擦りむいてるのに……もう、いいからこつちに来て」

「えっ？ ええと、レナさん……？」

どこか怒つたようにレナさんは言い、私の手首を握って引つ張っていく。周りのいくつもの心配げな瞳に見送られながら、私は戸惑いと共に彼女の後をついて行つた。

連れて行かれた先は、村の入り口からほど近い場所にある、レナさんの家だった。

玄関を入つてすぐにある、応接間のような部屋に足を踏み入れると、レナさんが手近な椅子を指し示す。

「そこに腰掛けて。今、傷薬と布を持ってくるから」

「すみません……。ありがとうございます」

奥に消えたレナさんを待つている間、椅子に座つたまま室内をぐるりと見回す。

壁は落ち着いた赤茶の板で、木の温もりを感じる部屋だ。レナさんのお手製のだろう、パツチワークのような様々な布を組み合わせた布地や、陶器の板に描かれた花の絵が飾られていた。カントリ調の、女性的で落ち着いた住まいだ。

壁には焦げ茶色の男物の外套や黒い帽子なども掛けられており、旦那さんの存在を感じる。

レナさんはすぐに戻つてくると、持ってきた籠を私の脇に置いた。そこには、水の張られた小さな桶と、傷薬や布が入っていた。

「お待ちせ。さ、拭くわね。ちよつと沁みるかもしれないけど、我慢して」

「はい」

彼女は床に膝をつき、私の頬の血を布でそつと拭き取ってくれる。

拭いては桶の水に布を浸し、拭いては浸しを繰り返した後、小さな壺に入った薄黄緑色の薬を塗つてくれたのだが――

「……いつ……！」

痛い。ものすごく沁みる。思わず身体が強張り、目の端に涙が滲んだ。

そんな私に、レナさんが呆れたように笑つて言う。

「そりゃ沁みるわよ。腫れてるし、血も出てるんだから」

「そ、そうですよね……」

とはいえ、先ほどの痛みが倍に膨れ上がったような激痛が走つたのだが……なんとなく反論でき

ない。頬を引き攣らせつつなんとか微笑み返す。

殴られた頬はともかく、傷口は開いただけで、さらに広がったわけではないようなのだが——ここまで感じる痛みが違うのは、もしかしたら薬の違いもあるのかもしれない。

ハイルが塗ってくれた、セスさんが作ったという薬は、清涼感のある香りがして、すつと痛みがひいていった。

作り手によってここまで与える効果が違うものなのかと心の中で密かに感心する。

レナさんがその薬を塗った上から、四角く切った薄い白の布地を貼り付けていく。この世界には粘着テープのような便利なものはない。だから、傷薬に粘性の材料を混ぜて布が皮膚に貼り付くようにするらしい。

私の頬から手を離すと、レナさんは頷いて立ち上がった。

「さ、終わったわ。もうしばらくは痛むと思うけど、それは我慢してちょうだい」

「ありがとうございます。すみません、助かりました」

頭を下げる私に、レナさんはかぶりを振る。

「いいのよ。……それにしても、あの傭兵がまた来るなんて、困ったことになったわね」

「ええ……。あの、私、ちよつと村長さんの所に行ってきます。事情をお話ししないと」

椅子から立ち上がるうとした私を、レナさんが止める。

「それはもう他の連中が話してるはずよ。あの傭兵が現れてすぐに、何人かが村長さんの家に行行ったのを見たから」

「ああ……そういえば」

思い出せば、朝方に村長さんの家の方角に駆けて行く人たちがいた。あれは、そういうことだったのか。

私は再び椅子に腰を下ろし、先ほどから気になっていたことをレナさんに尋ねた。

「この村に、ああいう暴漢めいた方々に対抗する手段というのはあるのでしょうか？」

この世界に来て不思議に思っていたのが、警察のように治安を守る組織がないらしいことだった。なんとなく騎士がそれに該当するのかなと思っていたが、昨日のマチルダさんの話を聞くとそんなに身近な存在でもないようだし。

事実、今まで見てきた町や村の中に、交番のような騎士の駐屯所はなかった。本当に騎士たちは、大元である騎士団の砦にしかないのだろうか。

そのように気軽に頼れる組織が身近にないのなら、武力や暴力に対して、どのように対処するのか疑問に感じたのだ。

レナさんが頬に片手を当て、思案顔で口にする。

「そうね……。お金のある貴族だったら私兵を雇ったり、大きな町だったら自警団があったりするんだらうけど。うちみたいな小さな村じゃ、そういうのはないから」

「そうになると、やはり騎士団……この村だと、南のイスカ騎士団に助けを請う形になるのでしょうか？」

昨日のマチルダさんの話を思い出して尋ねると、レナさんの紫色の瞳が憂い気味に伏せられた。

「ええ。ただ、来てもらえるかはわからないけど」

「来てもらえない可能性もあるのですか？」

そのための騎士団ではないのだろうか。

私のそんな戸惑いが伝わったのか、レナさんは苦笑すると、ゆっくりと首を振る。

「領内で大きないざこざがあれば来てくれるだろうけど、この程度だと微妙だわ。あたしたちにとつては大事だけど、小さな村の事件にいちいち顔を出していたら、騎士団が常に空っぽになっちゃうもの。あくまで騎士団は、他国からこの国を守るために創設されたものだから」

「ああ……そうか。それもそうですね」

「それに、もし来てもらえたとしてもきつと間に合わないわ。——同じ領内とはいえ、イスカ騎士団の砦は南の外れにあつて、村からだいぶ離れてるの。どんなに急いでも行きだけで半日近くかかるから……」

「そんなにかかるのですか……」

思わず眉根が寄る。それでは確かに難しそうだ。

今の話は、あくまで移動時間だけを想定しての話。騎士団に事情を説明し、了承を得ることまで考えれば、さらに時間を要するだろう。

そうなると、彼の騎士団の助力を考えに入れるのは難しいと言えた。

レナさんが頷いて付け足す。

「だから、明日の朝までに来てもらうのは、どう考えても無理よ。明後日なら、まだどうにかなっ

たかもしれないけど」

「騎士団に力になつてもらえる可能性は低いということですね……」

顎に片手を当て、無意識に唸る。

だからと言って、なにもせずにいるわけにはいかない。

傭兵の要求は、行動の対価に見合うものではなかった。退治してくれた報酬として多少のお礼は渡すとしても、法外な金銭を払わなければならない謂れはない。そもそもそんな大金は、清貧なこの村にはないはずだ。

しかしその要求を呑まなければ、若い少女たちが彼らに連れて行かれる。

村人たちはもちろん、抵抗するだろう。あの酒場で見せたように、鋤や鍬を手に立ち向かうかもしれない。力で敵わなかったとしても、大事な娘や家族を守るために。

そして対する相手は、素人相手にも剣を抜くことを躊躇わない無頼漢だ。このまま行けば、怪我人が——下手をすれば、命を落とす人が出る可能性だつてある。

「なにか……なにか他に、対抗できるような手段を考えないと……」

呟く私の額に、知らないうちに汗が滲む。

——考えないと。この村を、この村の人たちを守る方法を。だが冷静に考えようとしても焦りが生まれ、気持ちばかりが逸る。

頬に片手を当て、同じように頭を悩ませているレナさんがぼつりと口を開いた。

「そうね……。あんな傭兵なんかじゃなく、もつと腕が立つて信用できそうな傭兵が村に寄つてく

ればいいんだけど……」

レナさんの咳き（せき）を聞いて、私ははっとした。

「腕が立って……信用できそうなの……」

脳裏に浮かんだのは、鮮明な印象を残して去った二人の青年——ハイルとジャックだった。そうだ、彼らなら、事情を話せば力になってくれるかもしれない。

「ああ……でも、駄目だ」

次の瞬間にはそれは難しいと悟り、思わず唇を噛む。

なぜなら彼らは、この辺りの森を巡ると言っていたからだ。このミレーユの村の周囲だけでも、六つほど森がある。隣町まで範囲を広げればそれ以上だ。しかも、一つ一つの森がそれなりに大きい。そのすべてを巡って探すとなると、一日では足りないだろう。

そもそもジャックの体調を考えれば、森で野宿するのではなく、町や村に宿を取る可能性だってある。そうすれば範囲が広がるどころの話ではない。

それに、彼らは足の速い馬に乗っている。

一方、私たちが移動に使えるのは、村で積荷用に使っている足の遅い驢馬（ろま）くらいだ。探すのも時間がかかれば、移動中の彼らを見つけたとしても、追いつくのは至難（むず）の業（わざ）だろう。

「でも……じゃあ、どうしたら……」

「先生？ どうしたの、さっきから」

レナさんが心配そうに聞いてくるのをどこか遠くで聞きながら、私は考えを巡らせ続ける。

ハイルとジャックを捕まえるのは、無理ではないかもしれないがとても難しい。時間の面から考えて、徒労に終わってしまう可能性の方が高いだろう。

では……ウオーレンさんとセスさんならどうだ？ まだ出会ったことのない相手ではあるが、彼らはハイルたちの仲間だから、きっと強いだろうし、人柄もきちんとしているに違いない。

彼らはモンペールの町で情報収集していると、ハイルが言っていた。居場所が明確な相手なら、まだ見つけやすそうだ。

それに、町には森と違い、多くの人がいる。町の人々に聞いて回っていれば、本人たちに出会えなくても、少しずつ情報は得られるだろう。

ハイルとジャックを闇雲（やみぐも）に探すよりも、見知らぬ相手とはいえ近場にいるウオーレンさんとセスさんを探し、なんとか助力をお願いする方が確実な気がした。

そこまで考え、ようやく心配げなレナさんの瞳（ひとみ）に気づく。

彼女を安心させるように微笑むと、私は椅子から立ち上がった。

「すみません。やっぱり私は、村長さんの所に行つてこようと思います。色々と相談したいことがありますので」

「そう？ 痛くて動けないほど辛いつて言うんじゃないなら、いいんだけど……」

「ええ、体調は大丈夫です。……あ、それとレナさん。すみませんが、私の自宅にいるメアリーに言伝（ことづて）をお願いしてもよろしいですか？」

「え？ うん、いいわよ」

レナさんに、広場であった出来事の顛末と、今日も書物整理は休む旨をメアリーに伝えてほしいとお願いすると、私は村長さんの所へ足を向けた。

やるべきことは山ほどある。

村長さんの家に着くと、家人がばたばたと慌ただしく動き回っていた。

見れば、玄關を入ってすぐ横の客間には、先に訪れていたらしい村人たちの姿もある。大体が壮年や老人といった熟年の男性たちで、皆一様に難しい顔をして相談し合っている。武器や防具といった単語がかすかに漏れ聞こえてきたから、多分、傭兵たちとどう戦うのか対策を練っているのだろう。

私は改めて気を引き締め、通りかかった家人を呼び止めて急ぎ村長さんのもとへ通してもらおうとお願ひする。そして少し待つとすぐに、村長さんの部屋に案内された。

他の家々よりも上質な飴色の板が張られた廊下を、足早に進む。通い慣れた最奥の部屋に辿り着くと、私は入室して一礼した。

「失礼します。お忙しい中すみません」

「おお、ソーマ先生。いや、こちらこそ慌ただしいところを見せてしまってますまん」

先日と同じように大きな机に向かっている村長さんは、どこか疲れた様子だった。朝からひっきりなしに村人が訪れていたのだから、それも当然か。

私が来る直前までなにかの作業をしていたのか、机の上には羊皮紙に描かれた地図や、ごわっと

した革製の便箋のようなもの、それに簡素な羽ペンやインク瓶などが置かれていた。

肩を右拳で叩きながら、村長さんは姿勢を直し、真摯な瞳で私に向き直る。

「どうやら、村の入り口の方で大変なことがあったようじゃな」

「ええ、私もその場に居合わせまして……。村長さんは、どの辺りまでお聞きになられていますでしょうか」

「先日酒場で暴れた傭兵が今朝も現れ、魔物退治の報酬を要求しているのだと聞いておる。大金が、それが無理なら村の娘を寄こせとな。——ソーマ先生が見聞きしたと合っておるか？」

「はい、相違ありません。……あの」

すつと息を一つ吸うと、私はまっすぐに村長さんを見つめた。

「村長さんは、あの傭兵の要求を呑むお気持ちはおありですか？ 金貨五十枚ということでしたが」

まず確認しておきたいのがこれだった。

お給金をもらうようになって、この世界の金銭の価値はだいたい理解したので、金貨五十枚が大金であることはわかっている。

ただ、この村にそれだけのお金があるのかないのか、もしそれがあった場合、村長さんに支払う意思があるのかどうかを確認しておきたいと思ったのだ。

彼が、たとえば法外な金額を支払っても事を穏便に済ませようという考えであれば、私がウオーレンさんやセスさんを探しに行くのは余計なことになってしまふ。

それにこれは、私一人の考えで動かして良い問題ではない。この村全体に関わる一大事だ。

すぐにでも二人に助けを求めに行きたい気持ちもあったが、まずは村長さんに相談してからでなければと思った。

じつと息を詰めて待つ私に、村長さんはゆったりと口を開いた。

「ふむ。そやつに村の金をくれてやるかとな？ ……そんな気持ちは全くもってないのう」

村長さんの白く豊かな眉の下にある双眸まなこは、いつも通り穏やかに見えたが、その奥に静かな怒りの色を宿していた。

「そもそもそんな大金はこの村にはないし、あつたとしても、村の衆が心血込めて貯めた財産をどこぞの馬の骨とも知れん阿呆あほうにくれてやる義理はない。それに、可愛い娘たちをやるなどもつての外ほかじゃ」

「ええ……そうですね。そのお言葉を聞いて安心しました」

穏やかな口調ながらきつぱりと言いつつ切った村長さんに、ほっと安堵あんどの息を吐く。だがすぐに気持ちを引き締め、次の質問を投げかけた。

「では……報酬を渡さないと伝えた際、傭兵たちが取るだろう暴挙について、どのような対処をとるおつもりでしょうか？」

私はわずかに目を伏せ、話を続ける。

「この村で対抗する際の助力として考え得る方法は、領内にあるイスカ騎士団に助けを請うことくらいだと聞きました。それが現実的に考えて難しいことだとも」

「うむ、確かに難しいことじゃ。間に合う可能性は限りなく低いじゃろうのう……。だがやってみ

ないことにはどうにもならん。すでに二人、村人を騎士団のもとへ走らせておる」

「もう向かわせていらっしやったのですね」

さすが村長さん、行動が早いと内心で感心する。ならば、それはそれで良いだろう。来てももらえる可能性は低かったとしても、助けの手はできるだけ多くあつた方がいい。

胸を撫で下ろす私に、村長さんが目を光らせて言う。

「——して、ソーマ先生。その質問の意図はどこにある？」

私は顔を上げて答えた。

「先ほどある考えが浮かんだのです。もしかしたら、騎士団とは別に、助力を願える人たちがいるのではないかと」

「ほう……。もう一つの道か。続けておくれ」

村長さんが両腕を胸の前で組み、机の上にならずかに身を乗り出す。私は頷くと、静かに話し出した。

「先日、村を訪れた旅の剣士と弓士の方がいると村長さんにお話ししましたが、彼ら——もしくは彼らの仲間に手を貸してもらえないかと考えました。仲間はお二方いらっしやって、現在モンペールの町に滞在しているようなので、そちらに向き助力を願えたらと」

「ふむ。確か、剣士の方は酒場で彼の傭兵を取り押さえてくれたんじゃないのう。……腕が立つ衆なのか？」

村長さんが慎重に質問を寄こす。

「はい。剣士の方が剣を抜いたところはまだ見たことはありませんが、抜くまでもなくあの傭兵を取り押さえる様子は目にしました。身のこなしから、剣術だけでなく体術の心得もあるのではないかと思います」

一昨日の酒場での隙のないハイルの動きを思い浮かべながら口にする。次に脳裏に浮かんだのは、森で手際良く獲物を狩っていたジャックの姿だ。

「弓士の方は、高い精度で弓矢を扱います。獸相手でしたが、その技量の高さはよく伝わってきました。ですのでその兩名の仲間である二人も、彼らに並ぶ腕前と推測されます」

「なるほどのう……。しかし、彼らに受けてもらえるあてはあるのか？ この村とはなんの関係もない者たちじゃろうて」

その質問に、わずかにぐつと唇を引き結ぶ。村長さんの言う通りだ。

彼らはこの村と縁もゆかりもないし、そもそも大事な任務の最中とのこと。確実に受けてもらえる保証はなかった。だが大口を叩いても意味はないので、ありのままを述べる。

「確かに確実とは言えません。しかし、受けてもらえる可能性は低くはないと考えています」

村長さんにまつすぐ視線を合わせたまま続ける。

「私は少しの時間を共に過ごしたのですが、それでも彼らと……彼らが語る仲間の方々の人柄の良さは伝わってきました。弱っている者や困っている者に対し、手を差し伸べるのを厭わない方々です。他に頼れるものがない今、多少不確実だったとしても、それに賭けたいと思っています」

私の提案を吟味しているのだろう、しばらくの間村長さんは豊かな顎髭を撫でながらわずかに

俯く。

だが、次に顔を上げたときには、その無数の皺が刻まれた顔に、迷いはなかった。

「……うむ、あいわかった。儂はその者たちのことはよく知らんが、ソーマ先生の目は確かだと思っておる。その案に乗ろう」

村長さんは強い語調で続ける。

「では、彼らにも当たってみるとして。受けてもらえた際の報酬も、心ばかりではあるが村で用意しておく。——ソーマ先生、行ってくれるな？」

それにほつと胸を撫で下ろし答える。

「はい！ ……あ、ですが私は、お恥ずかしながら移動手段がなくて」

「それは問題ない。足が速い驢馬に荷車、それに御者を至急用意させよう。先生は荷車に乗ってください」

「すみません、助かります。では早速……」

話がまとまれば、後は行動に移すだけだ。すぐに向かおうと立ち上がると、村長さんに呼び止められた。

「ソーマ先生や」

「あ、はこ」

なんだろうと振り向くと、驚くほど静かな村長さんの双眸とぶつかった。穏やかな……どこか孫や子を慈しむような瞳だった。

「たどえその者たちや騎士団の助力が得られなくても、最終的に儂らには戦う覚悟がある。それを覚えておいてくれ」

「村長さん……」

その強い意志を込めた声に、私はわずかに戸惑って見返す。すると、村長さんはゆっくり立ち上がった。

小柄な村長さんの身長は、私の肩口にも満たない。だが背筋を伸ばしてしっかりと立つ彼は、まるで根を張った巨木のように大きく見えた。

「今までも、村の歴史でこのような事件はいくつもあった。山間の村ゆえ、山賊に襲われることも多くてな。怪我人だけでなく、時には命を落とす者も出た。だが、儂らの先祖は諦めなかった。その度に農具を持ち、野蛮な暴力に立ち向かってきたのじゃ。それゆえ、この村はまだここにこうしてある」

そして村長さんは小さく微笑んだ。

「ゾーマ先生がすべてを背負わんでいい。いざとなれば儂らは戦う。どうかそれだけは、忘れんてほしい」

「はい……」

私は掠れた声で答えた。

それは、ウォーレンさんやセスさんを見つけられなかったとき、もしくは頼みを受けてもらえなかったときのことを見越しての言葉なのだろう。駄目だったとしても、私が自分を責めないように

という気遣いだ。

そして私がモンペールの町に向かっている間も、着実に戦う準備を進めておくという意味も込めて。

火急の事態なのに、それでも村長さんは村人一人一人——新参者である私のことまでも思いやつてくれる。

優しい人だ。そして……強い人だとも思う。

それは目の前の彼だけでなく、村人たち全員に対していつも感じていることでもあった。

彼らはいつだって周りを気にかけて、なにかあれば全力で目の前の物事を乗り切ろうとする。力が強いわけではないのに。むしろ暴力に対しては、悲しくなるほど無力なのに。

私はやっぱりこの村を——この村のあたたかな人たちを守りたい。そう強く思った。

だから、改めてしっかりと頷いて答える。

「はい、村長さんのお言葉は忘れません。……ですが、私も決して諦めません。私は私のできることをし、最善を尽くします」

私は決意を胸に深く一礼すると、村長さんのいる部屋を退室した。